

まんだら通信

第 192 号 (通巻 228 号)

平成 24 年 06 月 西暦 2012 年 佛暦 2578 年 皇紀 2672 年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



アンギラサ師のお寺の仏塔地鎮祭
勉強を続けたいけれど、お家の事情で難しいという子供さんのための『あそか基金』を、面倒とも言わずに管理して下さる、モットウネ・アンギラサお坊さん。
そのお寺で、永年希望していた仏塔を造ることになり、この度、工事の無事を祈って地鎮祭をしましたと、メールで教えてもらいました。スリランカの言葉でダーガバと言いうのだそうですが、『あそか基金』の名前の元になったアソカ大王も、広いインド各地を巡礼して、沢山の仏塔やアシヨカ・ピラーという、高さ十数メートルの、鏡のように磨いた石造の円柱を造りました。お釈迦さまゆかりの聖地には、昨日作られたかと思うばかりの石柱を見ることが出来ます。
仏塔はまた、中国や朝鮮、タイやネパール、チベットなど仏教国では盛んに建てられました。日本でも、五重の塔などがこれに当たります。紫雲寺で五重の塔を建てることに同じように、何百年に一度という大工事ですね。
上の写真でお分かりのように、老若男女檀家の皆さんの喜びの表情が目に見えます。



仏塔の主体はお釈迦さまの『舍利』ですが、一緒に金銀などの宝物や五穀その他を中心に見つけた他のお寺の仏塔です。
左の写真は、参考としてインターネットで見つけた他のお寺の仏塔です。



お年寄りにも出来ること

先月号では、家の中でのお年寄りの役割を考えましたが、今月は少し間口を広く考えて見ました。

日本は『少子高齢化社会』と言われるように、産まれる子どもの数が少なくなると人口が減り続けています。

代りに、益々長生きになるお年寄りに関係が深い福祉予算はどんどん増えています。

今までは『胴上げ型』お神輿型と言われ、十人でお年寄りの福祉のお金を負担していました。それが一昨年は三人足らずで支える『騎馬戦型』になり、このままでは遠からず一人で支えなければならない『肩車型』になると言われます。これでは、子育てをしながら税金を払っている働き盛りに、余りにも荷が重過ぎます。

そうならないために政府は、消費税の増税をお願いしますと言っているのです。順序が違いますが、私も文句をつけていますが、難しいことはさておいて、お年寄りにも出来ることってないのでしょうか。

お金の出し入れに身近な郵便局。貯金の預け高は、何と百七十兆円余りもあるのだそうです。

桁が外れ過ぎて想像も出来ないのですが、『お年寄りは小金を持っている』という噂の、証拠の一つではないかと思うのです。あの『きんさん・ぎんさん』も言ったように、『老後のための蓄え』なのでしょう。

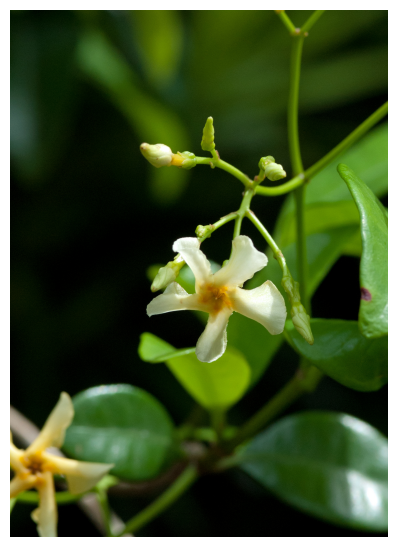
けれども、お金は道具ですから動かさなければ役に立ちません。市町村や福祉団体などに寄付する、という方法もあります。私も、僅かな金額を送って、市長さんからお礼状を貰いました。国民医療費は年間、既に三十六兆円を超えて、現役世代が払う保険料の半分を高齢者が使っているのだそうです。そしてその三割は七十五歳以上の『後期高齢者』が使い、その中でも回復の見込みのない『終末医療』にかかるお金が一ヶ月百万円以上と、一番大きいのだそうです。

お医者さんは、たとえ意識が戻らないことが分かっている患者さんでも、『治療をやめます』とは言えません。ここはひとつ、自分の目が黒いうちに、ハッキリと家族に伝えておきたいと、私は思っています。

◆終日降り続いた雨が夕方止みました。気象庁は今日梅雨入りを発表しました。これから秋までは、食中毒気をつける季節ですね。◆5月中旬、安房第2教区の皆さん40人と一緒に、京都の総本山にお参りに行ってきました。勿論、地元出身の能化様にお会いするのが楽しみひとつでしたから、93歳で益々元気なお姿を目の当たりにして、皆さん大に感激しました。◆親の面倒は子供が見る、という至極当たり前のことをすれば、親孝行が出来る上に、それを見ている我が子にも、想像以上の良い影響があります。

他に方法がなく、福祉施設の順番待ちをしている人を一人助けることにもなりますね。
インドに行った時、ガイドさんが「家内は、私の両親が年取ったので、高校の先生をやめて今では家庭にいます」と言っていました。
逆の実話を聞きました。庭に掘って小屋を建てて、親を住まわせていたせがれさん。親が亡くなったので取り壊そうとした時、その子供が言ったそうです。「あんたたちに住んでもらうのだから、そのままにしておいて」と。

◆今月は野草ではなく、ツル性の植物テイカカズラ(定家葛)【キョウチクトウ科テイカカズラ属】です。『新古今和歌集』や『新勅撰和歌集』で名高い藤原定家が、死後も、嘗て愛した式子内親王を忘れられず、この篇に生まれ変わって、そのお墓にまつわりついたという伝説に因んだものだそうです。花期は丁度今ごろ、咲きははじめは白く、やがて黄色になり、ほのかにジャスミンのような良い匂いがあります。花が終わると鞘のような実がで、木枯らしが吹く頃、銀色の長い毛を付けたタネが風に乗って舞い飛びます。 2012/06/09 龍渉



余滴

にっぽん人情小噺

三遊亭鳳豊ほうほう

第七十七話 命日

先日、私の高校時代の初恋の女性が亡くなりました、

その女性の息子さんから、妻に電話があったのです。年賀状の交換はしていましたが、もちろん、ご主人を含め、彼女の家族とは一度も会ったことはありません。それなのに、なぜ、息子さんは私に教えてくれたのでしょうか。

死因は、がんでした。

私は、毎年、手帳の右ページに遺言を書いておきます。

「満月の妻や家族に見守られ、すっぱん人生、できすぎ、できすぎ」

こんな私でもそれなりに幸せな生活を送れたのは、すべて家族に恵まれたから。家族と私は、月とすっぱんのちがいがあ

るのに、ありがたい、という意味です。

そして、その遺言の前の左ページには、これまで自分のまわりで亡くなった知人、友人、親戚の名前が書かれています。すでに五十人は越えています。

皆さん、亡くなられた方を偲びながら、一度書き出してごらんになるといいですよ。家族、親戚、職場の先輩、同僚、あ

るいは後輩、世話になった人、遊び友だち、同級生…。

（ああ、もうこんなにたくさんの方が亡くなつたのか……）きつとそう思いますよ。

その欄に彼女の名前も書き加えました。でも驚いたことにその三分の二はがんで亡くなっているのですね。私の妹も若くしてがんで亡くなり、先日、三回忌を済ませたばかりです。みなさんのまわりでも、がんで亡くなった方、いまでもがんと闘っていらつしやる方も多いと思います。

日本人の二人に一人ががんになり、三人にひとりのがんで死ぬ時代です。

がんで何だろう。今日は、がんと闘い、壮絶な最期を遂げた四十歳のある男性のお話をします。

神奈川県のある総合病院に、働き盛りのサラリーマンが精密検査に訪れました。飯に伊藤重雄さんとしておきましよう。伊藤さんは職場の健康診断で、最近、体重が極端に減ったことや、時々、背中が激しく痛むことなどを医師に訴えたところ、腎臓の再検査をするように言われたからでした。

精密検査の結果は、悲惨でした。すでに、腎臓ががんが進行しており、骨への転移も認められ、摘出手術も行えないという状況だったのです。

腎臓がんは、これだという特有の症状がほとんどなく、伊藤さんのような症状が開始した時は、すでに手遅れだというケースが多く、また臓器が小さいために摘出手術もかなり難易度が高いそうなのです。

そして、伊藤さんに余命半年という宣告がなされたのです。以前から、奥さんに「医者に余命を宣告されたら、きちんと知らせてくれ。残された命でやることがあるから」と言っていたので、奥さんが涙ながらに、伊藤さんに伝えたのでした。

しかし、いつも沈着冷静な伊藤さんでも、さすがにパニックに陥りました。

（なぜ、俺なんだ！ なぜ、いまなんだ！ もう、神は信じない！）

奥さんもどうしていいかわかりません。五歳のひと息子重樹君を抱き締めるしか、なす術がありませんでした。

しかし、がん細胞が腸管をふさぐようになり、その痛みは耐えがたいものとなりました。伊藤さんは、その激痛の中で、ようやく冷静さを取り戻しました。そし

て、こう思ったのだそうです。

（がんは、突然、できたのではない。十年、十五年かけて、俺の身体の中でがんになったのだ。いわば、俺の分身だ。子供と同じだ。このがんは、俺なのだ……。だとしたら、がんと共に生きられるまで生きよう）

そして、がんと闘う抗がん剤治療を拒否し、がんと共生する緩和治療を選んだのです。

モルヒネの投与により、それまでの痛みは一割程度になりました。しかし、モルヒネは麻薬の一種です。投与すればするほど、伊藤さんの神経がおかしくなっていきました。

奥さんは重樹君を連れて、毎日、病室にやってきました。

「パパ、大丈夫？」

余命半年だとは知らないで、心配そうに覗きこむわが子の顔を見ると、涙が溢れそうになってきます。

「パパ、今度の日曜日、僕の誕生日だよ。

六歳になるんだ」

「おお、そうか。じゃあ、プレゼントあげよう、何がいい？」

ふたりの会話が弾んだのは、その日が最後になりました。その夜から容態が急変したのです。ずつと、昏睡状態が続いた土曜日の夜、パッと伊藤さんは目を開けました。

「あなた、あなた！」

奥さんは伊藤さんに呼びかけました。いつ臨終を迎えてもおかしくない事態に備えて、医師と看護師が付き添っていました。

「先生！お願いがあります」伊藤さんは最後の力を振り絞って、医師の耳元でこう言つたのです。「先生、明日は息子の重樹の誕生日です。どうか明後日まで私を生かしておいて下さい。私の命日と重樹の誕生日が一緒の日では、あの子が一生可

哀想ですから」

「分かりました。大丈夫ですよ」

医師がそう言うのと、伊藤さんは安心してように昏睡状態にまた戻っていききました。でも、限界は近づいています。呼吸も荒くなってきました。医師たちは、伊藤さんの願いを叶えるべく必死で延命治療を試みました。そして、長い日曜日の一日が終わり、月曜日になった午前一時少し前、伊藤さんは静かに息を引き取りました。

それにしても、どうして、臨終の前日に伊藤さんは突然、覚醒し、息子の誕生日のことを医師に伝えたのでしょうか。不思議ですね。

「命を奪うと同時に、がん細胞も死ぬ。ひよつとしたら、パパの切ない願いをがんと聞き入れて、いっしょにがんばってくれたのかもしれない」

奥さんは、あとで看護師さんにそうつぶやいたそうです。

この人情小噺は月刊誌MOKU六月号の転載です。最初の時、恐る恐る転載の許可をお願いしたところ、どうぞどうぞお使い下さい。書き直しても構いません。と鷹揚に仰っていただいて、ひたすら恐縮したことでした。

今年のツバメ

庫裡の玄関に、ツバメが巣を作っていました。“基礎工事”がいい加減だったのか、タマゴ3箇もろとも、廊下に落ちてしまいました。大急ぎでテープで止めてやったのですが、使わずじまいと思っていたら本堂に作って、タマゴを産みました。孵ったのはどうやら2羽のようですが、朝早くから暗くなるまで、夫婦でエサ運びをしています。『日本野鳥の会』の情報によると、大分前からツバメの数が少なくなっているのだそうです。田畑が荒れたこと、人間の住まいの材料や形が変わって、巣作りが難しくなったのが原因だそうです。